

作者年譜・主な展示目録

- 浜田広介 明2 6.5～昭4 8.1 1
童話作家。高畠町一本柳生。本名広助。少年時代より新聞・雑誌等に作文を投稿。処女作「黄金の稲束」
- 斎藤茂吉 明1 5.7～昭2 8.2
歌人。上山市金瓶生。本名茂吉。医学博士。作歌・歌論。随筆文学に活躍。代表作「赤光」「白き山」「柿本八磨」
- 結城よしを 大9.3～昭1 9.9
詩人。南陽市宮内町生。本名芳夫。童謡界の古典的名作「ナイショ話」は昭和14年、満19歳の作である。
- 外村 繁 明3 5.1 2～昭3 6.7
小説家。滋賀県能登川町生。本名茂昭10年「草筏」、第1回 川賞候補昭14年池谷賞受賞。作家的地位確立
- 金子てい 明4 4.11～昭3 6.11
詩人。評論家 山形市上野生。本名てい。文部省社会教育局婦人教育課長で外村繁夫人。代名作詩「赤い鳥」
- 田沢稲舟 明7 1 2～明2 9.9
小説家。鶴岡市五日町生。本名錦山田美妙を師とし、「医学修業」を発表。主要作「しろはら」「五大堂」
- 高山樗牛 明4.1～明3 5.1 2
評論家。思想家。鶴岡市生。本名斎藤林次郎。明27年4、5月にわたって読売新聞に歴史小説「滝口入道」連載。
- 結城哀草果 明2 6.1 0～昭4 9.6
歌人。山形市下条生。本名光三郎。茂吉門下。歌風は質実・素朴。昭24年歌誌「山塊」を創刊、晩年「赤光」を刊。
- 正岡子規 慶応3年9～明3 5.9
俳人。歌人。愛媛県松山市生。幼名

処之助と云い、近代日本の俳句・短歌の主流を方向づけた。

- 与謝野晶子 明1 1.1 2～昭1 7.5
歌人。詩人。大阪府堺市生。本名晶子。M34年 晶子の筆名で、恋愛歌集「みだれ髪」を刊。世の視聴を集めた。
- 丸山 薫 明3 2.6～昭4 9.1 0
詩人。大分県大分市生。本名昭7年処女詩集「帆・ランプ・鷗」を出版。昭20年岩根沢に疎開(3年)。
- 田山花袋 明4.1 2～昭5.5
小説家。群馬県館林町生。本名録彌。明24年尾崎紅葉に入門。同年古桐軒主人の筆名で処女作「瓜畑」を発表

展 示 目 録



浜田 広介拓本	1点	本館所蔵
斎藤 茂吉拓本	1点	本館所蔵
結城よしお拓本	1点	県立図書館
田山 花袋拓本	1点	県立図書館
田沢 稲舟拓本	1点	県立図書館
高山 樗牛拓本	1点	県立図書館
結城哀草果拓本	3点	県立図書館
正岡 子規拓本	3点	本館所蔵
与謝野晶子拓本	1点	県立図書館
浜田広介書簡	宍戸一郎氏所蔵	他4点
丸山薫遺品	渡辺花子氏所蔵	他2点
結城よしを書簡	結城健三郎氏所蔵	他3点
浜田広介拓本	有馬館所蔵	他1点
斎藤茂吉書簡	板垣家子夫氏所蔵	他
高山樗牛遺墨	致道博物館所蔵	他1点
金子てい拓本	三春伊佐夫氏所蔵	
結城 哀草果	飯田正義氏所蔵	1点

やまがたの文学碑展

— 解説・展示目録 —

12月14日(日)～1月18日(日)

山形県立博物館

開催にあたって

文学碑という名称は新しい言葉であります。一般に詩歌・小説・論評・随筆などの広い意味での文学の範疇に入る仕事をした人々の業績をたたえたり、又は記念する文学を石に刻み、後世に伝えるために建立しています。

この催し物展は、そうした多くの文学碑の中から特に近代に焦点をあわせ、山形の文学的風土を、諸碑文の中から探求していただくために開くものであります。

広介の童話

里のべのわらべら

わ札を

知らねども

わ良へに我れは

こゑかけてゆく

(高畠町 万福寺)

むくどりの

夢のかあさん

白い鳥

さめて見る

かれ葉の上の

白い雪

(高畠町 鳩峰高原)

道はたの石はいい

いつも青空の下にかがみ

夜は星の花をながめ

雨にぬれても風でかわく

それにだいいち

だれでも

腰をかけてゆく

(高畠町 屋代小学校)

立ち止まり

振り返り

またも行く

一筋の道だった

(高畠町 高畠町庁舎前庭)

茂吉のふるさと

陸奥をふたわけさまに聳えたまふ

葦王の山の雲の中にたつ

(葦王山頂 熊野岳)

陸奥の葦王山並にみる雲の

ひねもす動き春立つらしも

(葦王 観松平)

最上川逆白波のたつまでに

ふぶくうべとなりけるかも

(大石田町 乗船寺境内)

のど赤き玄鳥二つ屋梁にいて

足乳根の母は死にたまふなり

(上市市金瓶 宝泉寺境内)

泉出身作家・歌人

○結城よしを

ないしょ話

ないしょ ないしょ

ないしょの話は

あのねのね

にこにこにっこり

ね かあちゃん

お耳へこっそり

あのおねのね

坊やおねがい

きいてよね

時雨音羽書

(山形市児童文化センター前)

○金子 てい

日和

しづかな日和たよ。

何にもないのに

みんなが笑っている。

けしの花のほこりが

となりの花へとんだよ。

(葦王第二小学校々庭)

○田沢 稲舟

人は知らねどほととぎす

なれのみ知るか あはれ

にも なのりて 過ぐる

声聞けは 我を訪ふか

となつかしく しばし

なぐさむころかな

(鶴岡市五日町)

○高山 樗牛

吾人は須らく現代を

超越せざるべからず

仲 高山林次郎

(鶴岡市 鶴岡公園内)

○結城哀草果

あかがりに露霜しみていためども

妻と稲刈れはころたのしも

(山形市 赤禿御来光展望台)

栗のいがの青きかおちし裏庭を

いがをぬらして雨は降りをり

(山形市平清水 平泉寺境内)

山形を訪れた人々

○正岡 子規

朝露や

四十八滝

下り船

(戸沢村 草薙温泉)

朝露や

船頭うたふ

最上川

(戸沢村古口)

ずんずんと

夏を流すや

最上川

(大石田町 乗船寺境内)

○与謝野晶子

さみだれの出羽の谷間の朝市に

傘してうるはおほむね女

(温海町 葉月橋河畔)

○丸山 薫

人目をよそに

春は いのちの花を飾り

秋には 深紅の炎と燃える

あれは 山ふかく

寂莫に生きる木々の姿が

いまは私になった

丸山 薫
(西川町 岩根沢小学校々庭)

○田山 花袋

「あし曳の山ふところにね

たれども猶風寒し落葉

みだれて」いかにもさびし

い生保内の一夜であった。

それは丁度日清戦争時代

で、国旗が山際の村の藁屋

にかけてあったりした。

帰途は山形に出て、母の故

郷を訪ひ、月山の姿にあくがれ、

山寺の勝を見て、山形市では

祖先の墓を十日町の梵行

寺に展した。それから

上の山へ出て、金山峠を越

え、山中七宿を経、渡瀬の

村木岩を見て、翌日は福島
へと出た。
—— 東京の三十年 ——
(山形市 梵行寺境内)